

## 田上集注釈(二)

西 木 忠 一

## 凡 例

一、本致は『私家集大成2』中古Ⅱ、『田上集』（島原松平文庫蔵）の注釈を試みたものである。

一、右底本の誤りと認められるところは他の歌集により改め、③にその旨を記した。

一、各歌の頭に底本の歌番号を記した。

一、本注釈は、『通釈・語釈』（必要に応じ）・『付』の三項目を立てて記した。

一、参考のために、『付』の項に『散木奇歌集』（『私家集大成2』中古Ⅱ、書陵部蔵）、『夫木抄』『万代集』（『新編国歌大観』）などを、それぞれの歌番号とともに記した。

一、本注釈において、『顕昭』は『散木集注』（群書類従巻第二九〇）に、『村上忠順』は『散木奇歌集標註』（愛知県刈谷市刈谷図書館蔵『散木奇歌集』）に、『玉井幸助』は『校註国歌大系第十三卷中古諸家集』に、『今井優』は

「源俊頼歌集 田上集の里」（田上郷土史料館報4、昭和五十四年十一月）に、『森本茂』は『校註歌枕大観 近江篇』にそれぞれよった。

（付）①『散木奇歌集標註』は、同書の「散木奇歌集標註序」から用いた書名である。

②愛知県刈谷市立刈谷図書館の平野大治氏に格別のご助力を賜わった。記して謝意を表するものである。

又、田に鹿のなくをき、て

五 秋の田のあせふみしたき鳴鹿は いなむしろをやしきしの  
ふらん

【通釈】又、田圃で鹿の鳴く声を聞いて（詠んだ歌）

秋の田のあぜを踏みしだいて鳴きまわっている雄鹿は、いなむしろを敷いてしきりに雌鹿を恋慕していることであろう。

語釈

○いなむしろ 「稻庭」。稻藁で編んだむしろ。他に稻が田圃の全面に植えられている有様を、むしろにたとえたものも「いなむしろ」と呼ばれるが、ここは前者であろう。○しきしのふ 「しき」は「しく」の連用形で、「しのふ」の上に付いてその動作が繰り返されることを示している。重ねてしきりにの意。「いなむしろをやしき」と「しきしのふ」の掛詞。

付①散木奇歌集（巻第三 秋部 八月）

また、田にしかのなくを聞て

四五 秋の田のあせふみしたきなく鹿は いなむしろをやしきてふすらん

②「あぜ踏みしだき鳴く鹿」の姿が、作者の想像を通して読者の眼前に強烈に現われて来る。稲庭を敷いたかと思まがうまでに鳴きまわる雄鹿の姿に心打たれよう。

一六 田上にて、鹿のこゑのはつかにきこえければ  
妻こふる鹿のどこゑにおとろければ かすかにも身の成にけるかな

通釈

田上において、鹿の声がかすかに聞えたので（詠んだ歌）

語釈

妻を恋しく思つて鳴く雄鹿の遠声に目を覚ますと、わが身までがかすかになって（滅入つて）しまうことだなあ

「顯注云とこゑとハ遠き音と云也」とし、村上忠順は「顯注云とこゑとハ遠き音と云也」と『散木集注』をそのまゝ引いている。玉井幸助氏は「遠き聲」として顯昭説を踏襲している。なお、今井優氏は「遠声の略か」（五頁）とした。ところが、「とこゑ」するどい声」と解したのは川田順氏（『平安秀歌 後期』三三三頁）であり、森本茂氏が『鋭声』で鋭く強い声が」（三三三頁）と、「か」と疑義を抱きつつも「鋭声」に傾斜されている。ここは詞書に「はつかにきこえければ」とあるので「鋭声」より「遠声」の方がふさわしいのではなからうか。

付①散木奇歌集（巻第三 秋部 八月）

四七 田上にて、しかのこゑのはるかに聞えければ  
妻こふる鹿のどこゑにおとろければ かすかにも身の成にけるかな

②夫木抄（巻第十二 秋部三）

四八 鹿のこゑのはるかにきこえければ  
つまこふるしかのどこゑにおどろけばかすかにも身の成にけるかな

通釈 田上において、鹿の声がかすかに聞えたので（訪んだ歌）

③川田順氏は『としゑ』するどい声で、利声とも鋭声とも書く。『おどろけば』目がさめると、の意。後世の俳人は『びいと鳴く尻声』と言った。妻恋をする男鹿の、ほそく鋭い声が、夜ふけて田上山の方からきこえて来る。その声に、目をさますと、深いものに、幽玄なものに身がなつてくる。『かすかにも身の』が一首の生命なることはもちろんである。『かすかに』は幽かに、または心ぼそくの意であるが、案外新しい言葉で、万葉集にはもちろん、古今集にも見えない。源氏物語に現われるのが最初らしい。俊頼の一首、『身』が幽かになると言つて『心』と言わなかったのも新しく、強い。この歌も俊成の理念の『幽玄』に先例を与えたものである。古来鹿鳴の歌多しといえども、この一首くらしいすぐれたものはまれと考えられる。』（『平安秀歌 後期』三三―三三頁）と賞讃された。関根慶子氏も「この歌は、少なくとも田上詠中では、第一の秀作であると私も考えている。夫木抄に見えるだけで川田氏以外に余り採りあげられなかったが、俊頼の全歌中でも佳作の一つとして改めて認め得るのではなからうか。』（『平安文学人と作品』一一九頁）と賞されている。

因みに、『散木奇歌集』にみえる「鹿」の歌を列挙してみ

夜もすから待かね山になく鹿は おぼろけにやは声をたつ

らん

このはちる峯のあらしに夢さめて 涙もよほす鹿のこゑかな

草枕この葉かたしくねさめには 鹿のこゑさへさひしかり

けふこ、に草の枕をむすはすは たれとか鹿のつまをこひまし

さをしかのなくねは野へに聞ゆれと 涙はとこの物にそありける

そのはらやふせやに忍ふさをしかも は、き、をさへみへすとやなく

よと、もにすむはつまきの山なれば なかてや鹿の秋をすくらん

みむろ山鹿のなくねにうちそへて 嵐ふくなり秋のゆふくれ

此ころはみふねの山にたつ鹿の 声をほにあげてなかな日そなき

さかりなるこ萩か原の夕露に 鹿なくころとたれにかたらん

などがあつて（『田上集』所収歌除く）、それぞれに俊頼の歌風を偲ばせる作である。しかし、川田氏・関根氏の賞讃されるごとき秀逸さは、一六をにおいて他に求めることは

できないであろう。俊頼の秀歌中の秀歌と呼びたい歌である。

田上にて、霧のたちふたかりて、せ、のをとはかり  
しければよめる  
旅人は霧を分てやとをらまし 河せの波の音せさりせば

通釈

田上において、霧が立ちこめて、川瀬の波の音ばかりがしたので詠んだ歌  
旅人は霧の中を分けて通るのであるうか、川瀬の波の音がしなかったならば。

付①散木奇歌集（巻第三 秋部 八月）

田上にて、霧のたちふたかりて、せ、のをとはかり  
しければよめる  
旅人はきりをわけてやとほらまし 川せの波のおとせさりせば

②上の句と下の句が倒置で詠じられている。つまり、「河せの波の……旅人は霧を……」となり、「せは……まし」で反実仮想の形式を採って詠じている。

おなし所にて、とふ人もなき旅のいふせかりけるに、  
みやこの人うらめしかりければ

二六 とへかしな霧まをわけてかみ山の こしけき岩の下のくち  
葉を

通釈

同じ所（田上）において、訪ねる人もいない旅がうつと  
うしくて、都の人が恨めしく思われたので（詠んだ歌）  
ぜひ訪ねて下さい、霧の中を分けて神山の木々の繁る谷  
の下にある朽ち葉であるこの私を。

語釈

〇とへかしな 「な」は他への勧誘を表す終助詞。  
かみ山（神山）「所在勘へず」（『近江輿地志略』。「大津市  
田上関津町にあつたとされるが、不詳」『角川日本地名大辞  
典25 滋賀県』。なお、今井優氏は田村博士の説を継承されて  
「大日山」を想定されている（五四首）。また、森本茂氏は  
「今日神山という山はなく、未詳であるが、田上山は『太神  
山』とも書き、天照大神降臨の伝説もあるから、神山は『太  
神山』の略称で、田上山（太神山）の別名ではなからうか」  
（三四〇首）とも推測されている。〇くち葉 朽ちて落ち  
た木々の葉で、「俊頼」自身を暗示している。

付①散木奇歌集（巻第三 秋部 八月）

同所にて、とふ人もなき旅のすみかに、霧ふりふたか  
りていふせかりけるに、みやこの人うらめしければ  
とへかしなきりまをわけてかみ山の こしけきたちの



したのくちはを

② 夫木抄（卷第十三 釈部四）

たなかみにて、とへ人もながる、きりの立つをみて

俊頼朝臣

吾亮 とへかした霧間を分けて神山の木しげき谷の下のくち  
葉を

田上にて舟にのりて、やしまといふ所に霧のいふせかり  
けるを見てよめる

一九 川霧の煙とみえてたつなへに 波わきかへるむろのやしま  
に

通釈 田上で舟に乗つて、八島という所に霧がかかつてうつと  
うしいのを見て詠んだ（歌）

川霧が煙かと思われるほどに立つとすぐに、波が湧きかえ  
るあの室の八島かと見まがうことである。この八島のあた  
りは。

語釈 ○ やしま 「大戸川が瀬田川に注ぎ込む合流点につくった

いくつもの砂洲」（今井優、五六頁）。 ○ 川霧 川の上や川の  
ほとりに立ちこめる霧。「ゆふさればさほのかはらの河ぎりに  
友まどはせる千鳥なくなり」（『拾遺集』卷第四冬、紀ともの

り、「うちながめて寄りゐ給へる袖の、重なりながら長やか  
に出でたりけるが川霧にぬれて……」（『源氏物語』東屋）。

○ なへに ……とともに。同時に。「ひぐらしのなきつるなへ  
に日はくれぬと思ふは山のかげにぞありける」（『古今集』卷第  
四秋歌上、よみ人しらず）。 ○ むろのやしま 下野国（栃木県）  
の歌枕。「いかでかはおもひありともしらすべきむろのやしま  
のけぶりならでは」（『詞花集』卷第七恋上、藤原実方朝臣）に  
見えるごとく、「むろのやしまのけぶり」という形で詠まれるこ  
とが多い。

附① 散木奇歌集（卷第三 秋部 八月）

田上にて、船にのりて、やしまといふ所に霧のいふせ  
かりけるをみてよめる

四九 川きりの煙と見えてたつなへに なみわけかくるむろ  
の八島に

② 夫木抄（卷第十三 秋部田）

五六 川霧の煙と見えてたつなへに浪わきかへるむろのやし  
まに 俊頼朝臣

この歌は、たなかみにて舟にのりてやしまといふ所  
にまかりたりけるに、きりたちこめていふせかりけ  
ればよめると云々

〔『夫木抄』では五三八七、五三八八を、家集 秋歌中  
の詞書にて並べている。〕

③〔黒津八島〕 湖中にあり。八島といへるは道萬島、彦九郎島、かうとう島、大島、高島、上の島、小島、しめの原島以上をいふ。此中、高島・上の島・大島・しめの原島の四島は南郷領なり。古来かくの如くなれども、元禄年中台命あつて川村平太夫湖水の瀬を穿ちほるが故に、八島の内六島を切崩されて、今僅に黒津の道萬島、南郷の大島のみ八島のかたみとして残れり其餘牛島等あり。〔『近江輿地志略』〕

④〔江州勢多川浚之事〕『京都御所役向大概覚書』七、元禄十一年

一、勢多川筋御普請の儀、小野半之助(宗清)・金丸又左衛門仰せ付けられ、川村平太夫指図之有り。売入共入札にて申し付くる。入用銀高五百拾五貫目余、此の銀当分大阪御金にて相済ませ、湖水辺水之を取る村々御料・私領貳百九ヶ村元懸ヶ、卯・辰・巳三年二右の銀上納仕り候様ニ申し付くる。右の村高拾六万貳千貳百五拾三石壹斗九升八合五勺なり。但し、百石ニ付き銀百五匁八分三厘宛掛クル。

〔『新修大津市史』第九卷、南部地域 四九三頁〕

〔注1〕小野半之助(宗清)——大津代官。

〔注2〕金丸又左衛門——琵琶湖の水運を統轄する船奉行。

〔注3〕卯・辰・巳三年——元禄十二年から同十四年。

(右注部は同市史(四九三頁)によった)

⑤黒津八島 道万島、彦九郎島、カウトウ島、大島、高島、上ノ島、小島、シメノ原島ノハツナリ此島ハ古ヨリアリテ俊頼卿ノ田上ニテ船ニ登リ八島ト云所ニ霧ノイフセカリケレハト歌ニアリ元禄年中徳川氏川村平太夫ニ命シ勢田川ヲ浚ヘシム其時ニ六島ヲ切り崩シタリ今ハ道万島ト大島ノミヲ存セリト〔『近江名跡案内記』北川舜治、明治二十四年三月〕

田上にて田かるをみてよめる

三  
うき身には山田のをしねをしこめて よをひたすらに恨つ  
るかな

通釈 田上において、田の稲を刈るのを見て詠んだ(歌)

このつらい我が身は農民たちから山田の晩稲を奪い取って生きているという、こうした世の中の仕組みをひたすら恨みに思うことである。

通釈 ○をしね 「おそいね(遅稲)の変化した語で、遅く成

熟する稲。おくて。「秋刈りしむろのおしねを思ひ出でて春ぞたなるに種もかしける」(『散木奇歌集』巻第一春)

付①散木奇歌集(巻第三 秋部 八月)

田上にて、たかるをみてよめる

四五

うき身には山田のをしねおしこめて 世をひたすらに  
恨みつる哉

②夫木抄(巻第十三 秋部三)

たなかみにて、むかひの山田かるを見て

五〇三

うき身には山田のをしねおしこめて世をひたすらにう  
らみつるかな

俊頼朝臣

③をしねは。晩稲なり。ひたすらは。田のひだにそへたり。

万葉には。引板とかけり。歌云。衣手に水漬つくまでうへ  
し田を引板われはへてまもりをるくるし。鳴子は万葉に見  
えず。(顕昭『散木集注』)

④「宮仕えの仕事をやめた者にとって、田舎へ出むいて行  
つて、ささやかな山田の稲を農民から収奪することで生き  
ねばならない。それにはわずらわしいことが多いと思いま  
す。そんなことをしなければならぬわが身の上や世の中

の仕組みを恨めしく思った歌であろうと思います。とすれ  
ば『田刈るを見て』とは、俊頼自身の管理地の稲刈を眺め  
ているわけであります(今井優、三二頁)。

秋の田をよめる

三

山里はいていこのへるたもとたに 風そよめきて袖しほる  
なり

⑤ 底本二三四句「いでこのくるたもこそ 風そよめ  
て」とある。誤字脱字とみて『散木奇歌集』により  
改める。

通釈

秋の田をよんだ(歌)

山里は坐つて休んでいる私の袂にさえ、折からの風がそよ  
そよと吹いて来て、そのわびしさに涙を流すことである。

語釈

〇いて「居て(坐つて)」と解する。「出で(今井優、  
六頁)」とする説もある。〇いこのへる「いこのふ(憩)は  
休息する意。〇そよめきて「そよめく」はそよそよ、

さやさやと音がする意。「たてれば袖にそよめく風の音の近  
くは聞けど逢ひもみぬかな」(『貫之集』)

付①散木奇歌集(巻三 秋部 八月)

(省略)

② 顕昭は二三句を「いていこのへるたもとに」(『群書類從

散木集』も同じ)として、「たもとこは、稻名なり。但つねには。ちもとこといふを。たもとこといふにや。此集にも。ちもとことかきたるもあれど。末の袖しぼるによせて。たもとことよめるにやあらん。五音かよひたれば。ちもとこをたもとことよみなせるにもや。此人のうたは。其例おほく侍り」と注記している。

③ 「たもとだに」(三句目)として「袂にさえ」と通釈してみた。但し、そうすると詞書の「秋の田をよめる」を「山里は……」の歌とのかかわりが至極希薄になる。ここは「田もと」(但し意味不明)と「袂」との掛詞になっているのではないかと考えられる。

三 稲のたをれたるを見て  
おほつかなたか袖のこにひきかさね ほうしこのいねかへしそめけむ

② 底本四句「ほうしこのつね」とある。誤写とみて『散木奇歌集』により改める。

通釈 稲の倒れているのを見て(詠んだ歌)

いぶかしいことだ。いったい誰が袖を重ねて共に寝て、法師をここに泊めて帰したであろう。

語釈 ○おほつかな 形容詞「おぼつかなし」の語幹。「過ぎし年、月ごろの事もおぼつかかなりければ……」(『蜻蛉日記』上、六十巻といふ文読み給ひ、おぼつかなき所々、解かせないとしておはしますを)、『源氏物語』賢木。○いねかへし

「稲かへし」に「寝ねかへし」の意を掛ける。

付① 散木奇歌集(巻第三 秋部 八月)

いねのたふれたるをみ  
(歌、省略)

② 「そてのこ。ほうしこ。ともに稻名也」(顕昭)。なお『散木集注』は結句を「かふしそめけん」の本文を採り、かつ「かふすとは。稲の実の成て傾をいふ也」とも注している。

三 船にのりてあそひけるに、神山のわたりにて夕つくよをみてよめる  
くもりなき夕つくよをもみつるかな こやかみ山のしるしなるらん

通釈 船に乗って遊んでいた時に、神山のあたりで夕月を見て詠んだ(歌)

一点のくもりもない夕月を見たことだよ。これこそが神山のしるしなのであろう。

付①散木奇歌集（巻第三 秋部 八月）

船にのりてあそひけるに、神山のわたりにてゆふつく  
夜をみてよめる

四六

くもりなきゆふつく夜をもみ〇る哉 こや神山のしる  
しなるらん

②「神山は特に河畔にあつて、舟子の信仰を集めたのであり

ましようか。俊頼もいま舟にのつて遊びに来ているのです。  
遊んでいるうちに日が暮れてきて水面が暗くて危険であり  
ます。このころは瀬田川底は岩が多くて浅瀬が多かったの  
です。ちよつと俊頼は物におびえはじめていたのでしょう。  
ところがばあつと水面が明るくなった。思えば神山の付近  
であつた。そこで、「こや神山のしるしなるらん」と恐怖の  
とれた心で喜んだわけです。」と今井優氏（五四～五五頁）  
は評された。「恐怖」にかかわる点は疑義もあるが、一応  
は参考となろう。

田上に侍ける比、九月十三夜つねのとしよりも空はれて  
おもしろかりけるに、鹿の声さへあはれなりければよめ  
る

二四  
いかにせんこよひの月に妻こふる 鹿のねをさへそへてき  
くかな

通釈

田上に住んでいた頃、九月十三夜の月がいつもの年より  
も空がすつきりと晴れわたつて情趣のある上に、鹿の声  
までもあわれに聞えて来たので詠んだ（歌）

今宵の冴えた月の趣きに添えて妻を恋うて鳴く雄鹿の声ま  
でしじみと聞くことだなあ。この思いをどうしようか。  
（どうすればよからうか）。

付①散木奇歌集（巻第三 秋部 九月）

田上に侍けるころ、九月十三夜つねの年よりも空はれて  
おもしろかりけるに、しかのこゑさへあはれなりければ  
吾  
いかにせんこよひの月につまこふる 鹿のねをさへそ  
へてきくかな

②夫木抄（巻第十二 秋部三）

おなじ所にて九月十三夜

同

四三

いかにせんこよひの月につまこふるしかのねをさへそ  
へてきくかな

③「九月十三夜」の月を「おもしろかり」、「鹿の声」を「あ  
はれなり」と詞書に記している。澄んだ月のもので聞え  
て来る雄鹿の妻を恋慕う声。視覚のみならず聴覚にまで  
訴えてくる秋の夜の情趣である。

たなかみにて、月のあか、りける夜、むかし帥殿のおは  
しまし、おりのこととおもひ出てよめる  
いにしへの面影をさへさしそへて　しのひかたくもする  
月哉

通釈

田上において、月が明るく輝く夜、その昔帥殿（俊頼の  
父「経信」）がおいでの折のことなどを思い出して詠んだ  
（歌）

過ぎ去った昔の故帥殿の面影までも思い出されるほどに、  
堪えがたく澄んだ月だなあ。

語釈

○帥殿　源経信。一〇一六（長和五）～一〇九七年（承徳  
元。平安後期の公卿。藏人頭・大藏卿・大納言・大宰権帥な  
ど歴任。

付①散木奇歌集（巻第三　秋部　九月）

田上にて月のあか、りける夜、むかし帥殿のおはしま  
し、おりの事など思ひ出てよめる  
続古  
いにしへの面かけをさへさしそへて　忍ひかたくもす  
る月かな

②続古今集（巻第十九　雑歌下）

たなかみの家にて、月あかりける夜、むかしおもひ

一七元  
七元

いでてよみ侍りける　俊頼朝臣  
いにしへのおもかげをさへさしそへてしのびがたくも  
する月かな

③万代集（巻第十五　雑歌二）

月いとあかりけるよ、むかしを思ひいでて

元七

いにしへのおもかげをさへさしそへてしのびがたくも  
する月かな　俊頼朝臣

④『近江輿地志略』（五七六～五七七頁）に

曾束村　淀村の西二十八町にある村也。土俗は田上郷内に  
あらずといへども田上郷内也。曾束は旧帥家也。帥大納  
言経信別業を此地に構へ、俊頼俊重三世相承してト居す、  
故に地名を帥家といへり。今曾束の字に作れり。

と見え、「帥家」「曾束」として経信の「別業」を述べている。  
しかし、経信の別業はこの地ではなく田上であったことは  
疑いをいれない。

⑤澄んだ月に故帥殿の面影を見するという、常套のパターンで  
ある。「三五夜中新月色　二千里外故人心」（和漢朗詠集）

たなかみの家にて、月あかりける夜、むかしおもひ

ある三三夜中新月色 二千里外故人心(和漢朗詠集)

と同趣向の歌であらう。

月のまへの入江にうつりて、魚のあそふもかくれなくみえければ

三六 にこりなきみのもとに月のやとらすはいかてあさちの数を  
しらまし

② 底本二句「みのもの月の」とある。『散木奇歌集』に  
より「みのものに月の」に改める。また、結局「枝<sup>数イ</sup>  
をしらまし」とある。「あさちの枝」では意味不明に  
より「数イ」の傍書を探る。

通釈

月が前の入江の水面に写つて、魚が遊ぶのもすっかり見  
えたので(詠んだ歌)

濁りのない水面に月が宿らなくて(写らなくて)、どうし  
てあさちの数を知ることができようか。

語釈

○あさち 「あさち」は、おいかわ(追河)の異名。追  
河)の異名。おいかわはコイ科の淡水魚。川の中や下流域に  
多い。関西「ハエ」・関東「ヤマベ」と呼び、全長一〇―一  
五cm。顕昭は「あさちは魚名也。鰕とかけり。鮠という魚の  
おひて。色のあかみたるを云とも下人申歟」と注記する。

付① 散木奇歌集(巻第三 秋部 九月)

月、前のいり江にうつりて、魚のあそふ、かくれな  
くみえければ  
五三 三六 にこりなきみのもとに月のやとらすはいかてあさちのか  
すをしらまし

② 夫木抄(巻第二十七 雑部九 動物部)

述懐百首

三六 にこりなきみのもとに月のやどらおはいかてあさちの数  
をしらまし

此歌は、たなかみに侍りけるに、まへの入江に月うつ  
りて魚のあそふもかくれなくみえければよめると云々

③ 関根慶子氏は

八月十五夜、鳥羽殿にて、池上月

照る月のいはまの水にやどらずは玉ある数をいかでしらま  
し(『大納言経信集』)

と二六の歌とが「発想もことばも殆どそっくりで、俊頼が  
経信の歌に注目した形跡は、この歌によってみるだけでも  
明瞭である」と指摘され、かつ「俊頼は経信の歌境をさら  
に深め広めていて、俊成の幽玄の歌風を拓く源泉ともな

り、視界歌材の広き用語の自由拡大をも試みた。」とも述べられた『平安文学 人と作品 ところどころ』 一二四頁。

三 月のいらんとするをみてよめる  
月みればすくなみ神そうらめしき にしに山をはつくらさ  
りせは

〔通釈〕 月が西の山に入ろうとするのを見て詠んだ（歌）

西の山に入ろうとする月を見ると、あの大国主命と協力して国作りを行なったという少名毘古那神がうらめしく思われる。なぜならば西の方角に山を作らなかつたならば（月が西山に入ることはないのだから）。

〔語釈〕 ○すくなみ神 「少彦名命」（すくなびこなのみこと）とも。大国主命とともに国作りを行ない、温泉を開発。酒をも

造り、のち常世の国に去った。

〔付〕①散木奇歌集（巻第三 秋部 九月）

吾四 月のいらんとするをみてよめる  
月みればすくなみかみそうらめしき にしには山をつ  
くらさりせは

②夫木抄（巻第三十四 雑歌十六）

すくなみの神 豊前

家集 月夜中 俊頼朝臣

一〇六 月見ればすくなみ神ぞうらめしきにしには山をつく  
らざりせ

③「山をは。すくなひこな神のつくれるなり。万葉歌にはおほなむちすくなみ神のつくりたるいもせの山をみればよしもとあり。」（『散木集注』）

三 月の夜、いかにも空にたなひける雲のなかりければ  
月の行あたりはいはし大かたの 空にも雲のなきよなりけり

〔通釈〕 月の夜、たしかに空にたなびく雲がなかつたので（詠んだ歌）

月のめぐり行く西の方角のことは口にするまい。大方の空に雲さえない夜（そんな暗い世間）であることだよ。

〔付〕①散木奇歌集（巻第三 秋部 九月）

吾五 月の夜、いかにも空にたなひける雲なかりければ  
月のゆくあたりはいはしおほかたの 空にも雲のなき  
世也けり

②月を覆い隠すような雲ではなく、「たなびける雲」。そんな雲



② 夫木抄（卷第三十四 雑歌十六）

が西の方角はいうに及ばず、空にはどこにも見えないという。却って味わいのない、月のみの夜だという。作者の美意識の問題でもあろうが、月と作者とを重ねてみれば、月に雲・作者に友などに相当するものが存在しないことを詠じていて、作者の孤独が読者に伝えられているよう。

田上にて、川のほとりにたちなみたる柳の木に、そまむきといふ物をかけたるか、月よにこくらくみえければよめる

元 河柳さしもおほえぬすかたかな そは、さみつ、月にたてれは

通釈

田上において、川のほとりに立ち並んでいる柳の木に、そばというものをかけて干してあるのが、月の光のもとで小暗く見えたので詠んだ（歌）

河辺の柳が柳そのままに見えない姿で立ち並んでいることだ。そま麦を枝に掛けたままで月の光をうけて立って立っていると。

語釈

○そまむき 「蕎麦」（そば）の古名。

付

①散木奇歌集（巻第三 秋部 九月）

田上にて、かはのほとりにたちなみたる柳の木に、そまむきといふものをかけたるか、月夜にこくらくみえ

② 月を覆い隠すような雲ではなく「たなひける雲」そんな雲

ければよめる

元

川柳さしもおほえぬすかたかな そは、さみつ、月みたてれと

② 夫木抄（巻第三 春部三）

家集

俊頼朝臣

六六 川柳さしもおほえぬすがたかなそばはさみつつ月みたてれと

此歌は、たなかみに侍りけるに、柳にそばむきといふ物をかけたりけるを、月よみてよめる云々

③ 玉井幸助氏が「そばはさみつつ」に注して「著物のすそをか、げはさむ事を蕎麦にかく」とされたごとく、柳の枝にそばを掛けた姿を月夜の小暗い中に見て、女性を想定して詠じた歌である。

なか月のはつかあまりの月の、あかつきかたにほそくかすかにてみえければよめる

三

立のほる有明の月を人しれす 心ほそさの友と見るかな

通釈

九月二十日過ぎの月が、暁方に細くかすかに見えたので詠んだ（歌）

東の空から立ちのぼる有明の月を、人知れず心細さゆえに

友として見ることだよ。

①散木奇歌集（巻第三 秋部 九月）

なか月のはつかあまりの月の、あかつき方にほそくか  
すかに見えければよめる

② たちのほる有明の月を人しれす 心ほそきの友とみる

かな

③ ほどなく冬に入る頃である。そんな時の「あかつき方」。

月は「ほそくかすか」である。作者の周辺に人はいない。  
作者の心細さはひとしおであろう。そこにおのずと空の月  
を友にしようとする心が生ずる。そうしたわびしい思いの  
歌である。

九月廿日あまりばかりの有明の月に御目さまして、いみ  
じう久しうもなりにけるかな、あはれこの月は見らんか  
し、人やあるらんとおぼせど、れいの童ばかりを御ともに  
ておはしまして、門をたゝかせ給ふに、女目をさましてよ  
ろづ思ひつづけふしたる程なりけり。

と記される『和泉式部日記』の条を思わせる。日記中の宮  
と女の贈答歌の

我ならぬ人もさぞ見んなが月の有明の月にしかじあはれは  
よそにてもおなじ心に有明の月を見るやと誰に問はまし

の女の歌と情趣的には三〇の歌と一つの歌であるといえよ  
う。

たなかみに侍ける比、九月九日にもなりにければ、こと  
のもと、菊もとめてすきけるついでによめる

三 竹の葉にうかへるきくをかたふけて われのみしつむなけ  
きをそする

通釈

田上にいた頃、九月九日にもなったので、以前からの習  
慣で菊を求めて酒に浮かべて飲んだ折に詠んだ（歌）

菊の花の浮かんでゐる酒の杯をかたむけて自分だけが思い  
沈む嘆きをするのだ。

語釈

○すきける 飲食物を口に流し込むことを「すく」とい  
う。「過ぎける」（森本茂、三三三頁）は従えない。○竹の葉

「竹葉」の訓読で、酒の異名。「竹葉酒名チクエウ」、『色葉字類

抄』。「饗頭竹葉経春熟」階底薔薇入夏開（饗のほとりの竹葉

は春を経て熟す 階の底の薔薇は夏に入りて開く）（『和漢朗  
詠集』上、首夏）。

付 散木奇歌集（巻第三 秋部 九月）

田上に侍ける比、九月九日にもなりにければ、ことの  
もと、菊もとめてすきけるついでに

西三 竹の葉にうかへるきくをかたふけて われのみしつむけ  
きをそする

② 夫木抄（巻第三十二 雑部十四）

九月九日を

俊頼朝臣

二五 美 竹のはにうかべるきくをかたふけてわれのみしづむな  
きをぞする

③ 「九月九日」は「重陽の日」。宮中で催された観菊の宴の

日である。杯に菊の花弁を浮かべた酒を酌みかわして長寿を祝  
い、かつ群臣に詩をつくらせた。この歌は「菊をうかべる」  
と「沈む漢き」の「浮」と「沈」が対比されていて、そこ  
に俊頼の境涯が思われる歌である。

たなかみにて、はした山を見てよめる

をく霜や染はつすらんもみち葉の むらこにみゆるはした  
山かな

② 底本一二句「をく霜を染はてつらん」とする。誤写  
とみて『散木奇歌集』により改める。

通釈 田上において、はした山を見て詠んだ（歌）

置く霜がまあ、染めはずしてしまっているのであらうか、  
もみじ葉がむらこに見えるのはした山だなあ。

語釈

○染めはつす 「染め外す」で、全体を染め尽すのでは  
なくて、染めていない所が残っている。○むらこ 「村濃・  
斑濃・叢濃」。染色の名称で、同色のあちらこちらに濃淡のあ  
ることをいう。「色々の紅葉、うすき濃きむらごにまじり、月  
おもしろき夕暮れに……」（『宇津保物語』嵯峨院）

付 ① 散木奇歌集（巻第三 秋部 八月）

田上にて、はした山をみてよめる  
五美 をく霜やそめはつすらむ紅葉はの むらこにみゆるは  
した山かな

② 夫木抄（巻第二十 雑部二）

はした山、半 近江

六三 おく霜や染めはつすらん紅葉葉のむらこにみゆるはし  
た山かな

③ はしたやま（半山）大津市  
大津市田上関津町にあったという山。小竹生嶽（笹間ヶ嶽）  
の山域に連なる田上花崗岩山地の一つ。（『角川日本地名辞典』）

## 25、滋賀県)

たなかみのみなみの山にて、しるひろひけるついでに、  
もみちをおりて、もてきたりけるをみてよめる

三 しるをのみこのみひろふに紅葉、を あからさまにもたれ  
おりつらん

通釈

田上の南の山において、椎を拾ったついでに、紅葉の枝  
を折って来たのを見て詠んだ(歌)

椎の実を好んで拾う時に、紅葉の枝をついちよつと手折つ  
て来たのは、いったい誰であろうか。

語釈

○このみ 「木の実」と「好み」を掛ける。 ○あから

さま 「紅葉」と「あからさま」は縁語。『散木集注』(顕昭)

は「椎を葉にそへ好とよみ。紅葉を赤にそへてあからさまと  
よめり」と注する。

付①散木奇歌集(巻第三 秋部 九月)

田上のみなみの山にて、椎ひろひけるついでに、も  
みちを折てきたりけるをみてよめる

五 しるをのみこのみひろふに紅葉、を あからさまにも  
たれをりつらん

## ②夫木抄(巻第十五 秋部六)

俊頼朝臣

空三

しひをのみこのみひろふにもみぢばをあからさまにも  
たれをりつらん

此歌は、たなかみの山里にて、山人のしひろひけ  
るついでに、もみぢををりてきたりけるをみてよめ  
る云々

殿下にて五首歌よませ給けるに、水辺紅葉といへること  
をよめる

私言、詞書ありて、一首ありて、左の歌あり、つれく  
たち出てといへる、田上の事にやときこゆれば書入に  
そ

秋のくれにきりくすのなくをき、てよめる

三 啼かへせ秋にをくる、きりくす くれなはこゑのよはるの  
みかは

通釈

殿下(関白家)において五首の歌を詠ませなさつた時に  
水辺紅葉ということを詠んだ(歌)

私言、詞書があつて、一首歌があつて、左の歌がある。  
退屈しのぎにたち出でてといっている(詞書にある)  
ので、田上の事であろうかと申す人がいるので書き入  
れたのである。

秋のくれにきりぎりすの鳴く声を聞いて詠んだ（歌）

さかんに啼け、過ぎ去っていく秋におくれるきりぎりすよ。  
秋がくれてしまったならば声のみが弱ってしまうだけであ  
ろうか（いや、声のみでなく身まで弱り、いずれは死んで  
しまうのだから）。

語釈

○きり／＼す 「こおろぎ」の古名。「蟋蟀師 支利支利須」  
（『新撰字鏡』）

付

①散木奇歌集（巻第三 秋部 九月）

殿下にて五首の歌よませ給ひけるに、水辺紅葉といへ  
る事をよめる

五五

もみち葉のかけたにたらぬ物ならば たれかみきわを  
たちはなれまし

秋のくれに、きり／＼すのなくを聞てよめる

五三

なきかへせ秋にかくる、きり／＼す くれなは声のよ  
わるのみかは

つれ／＼にたちいて、あそひけるに、かれ野に女郎

のた、ひとものこりたるをみてよめる

五三

たれかはなかれ野を忍ふおみなへし をのれもしたへ  
秋の暮をは

②「殿下にて五首歌よませ給けるに……」以下の詞書につい

れたのである。

て述べる

殿下にて五首歌よませ給けるに、水辺紅葉といへること  
をよめる

私言、<sup>④</sup>詞書ありて、<sup>⑤</sup>一首ありて、<sup>⑥</sup>左の歌あり、<sup>⑦</sup>つれ／＼  
たち出てといへる、田上の事にやときこゆれば書入  
にそ

―線部①②③④⑤に相当する箇所を『散木奇歌集』から抜き  
出すと

① 殿下にて五首歌……事をよめる

② もみち葉のかけたにたらぬ物ならば、の歌

③ なきかへせ秋にかくる、きり／＼す、の歌

④ つれ／＼にたちいて、あそひけるに、……のこりた  
るをみて

となる。つまり、「殿下にて五首歌……」の五首はその詞書  
にふさわしい歌は一首のみである。続く「秋のくれに、き  
り／＼すのなくを聞てよめる なきかへせ秋にかくる、き  
り／＼すくれなは声のよはるのみかは」は、どこでの作か  
不明である。だが、次の歌（五六三）の詞書に「つれ／＼  
にたちいて、あそひけるに」とあるので、これも田上での

作であろうと考えて、前の「なきかへせ……」の歌も書き入れたという断り書きである。これは『田上集』編纂者のものであるというまでもなく、当然ながら『田上集』編纂者は源俊頼以外の後人だということになるのである。